

日本聖公会 川越基督教会

資料委員会 便り

第12号
2024年
12月25日
発行

ARCHIVES NEWS

イエス様の足跡

司祭 パウロ 鈴木伸明



日頃からの歴史資料委員会のご尽力に感謝しています。

歴史は不断の歩みであり、多くの資料をあたりながらその出来事の精査や後の世への影

響を明らかにしてく作業は、労多く多難であると思います。

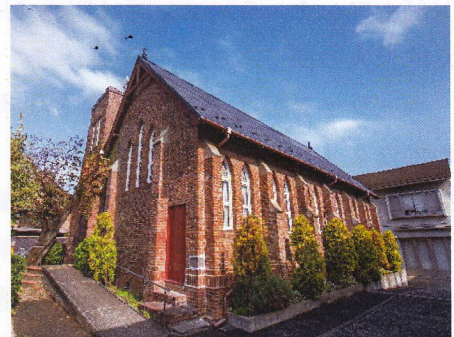
今から15年以上前、北関東教区で110年史を編纂することになり、私はそのまとめ役を仰せつかりました。北関東教区へ来て間もない私でしたので、多くの生き証人の方々の力を借りなければこの仕事を全うできないと考え、教会で長く信仰生活を続けておられる皆様のご協力をいただきました。また、教区の歩みは各教会の歩みが重なって形成されるとの考えから、本の第一部に各教会の歩みを収録することにしました。

110年史の編纂には多くの困難がありましたが、最も大きなことは、教区婦人会に関することでした。北関東教区婦人会は、浦和諸聖徒教会の今村さだ子さんが大きな働きを担われ、活躍しておられましたが、今村さんが逝去された後、その貴重

な働きを多くの方々が受け継いでいったものの、今村さだ子さんが取り組んでおられた事柄を掌握している方がほとんどおられなかったのです。できるだけ資料を集めました。今村さだ子さんが生涯をかけて取り組まれた教区婦人会の業を、ほんの一部しか記録することが出来ず残念でした。

人間は、神様が定めた時に生まれ、定めた時に神様の許へ召されていきます。それは神様がお決めになることです。そうした中、歴史資料をいつ、どのようなタイミングでまとめていくのが重要なのかは、答えのない問いかけです。常日頃より、後の世代に語れるように資料をまとめたり、申し送りをしたりすることが重要であると思わされます。

福音書の中で最古であるマルコによる福音書が記されたのは、イエス様が天に帰られてから日々が過ぎ、イエス様の宣教活動の直接の生き証人たちが少なくなってしまう、このま



まではイエス様の宣教活動を誰も伝えられなくなってしまう、そうなる前に記録として残しておく責任があると考えて、口伝を中心に福音書がまとめられたからであると考えられています。適切な時期に、適切な内容がまとめられたからこそ、今日の私たちが福音を聞き、時と距離を超えて学ぶことができるのです。

また、教会の歩みは、イエス様ご自身の歩みでもあります。イエス様は、ご自分が行くつもりであった町や村へ弟子たちを先に遣わされました。この地に福音の種がまかれたということは、イエ

ス様は川越に来るつもりでおられたわけです。イエス様の宣教の業を記した福音記者と同じ使命が、私たちにも与えられているわけです。

歴史資料の編纂は、専門の方々だけの仕事と思われることがよくありますが、そうではなく私たち一人一人の責任であり、適切な時期に行わなければ二度と編纂が出来なくなるのを、よく認識していきたいと思います。

皆様のお働きの上に、主の祝福が豊かにありますよう、お祈りいたします。

1906（明治39）年、川越町でのクリスマスと クリスマスケーキの話

ドウエル・ベアリ

埼玉県内で西洋菓子が製造販売された詳細な時期は不明であるが、川越にある亀屋のクリスマスケーキの販売は1906年10月の広告を見ると早い時期のものと考えられる。同年亀屋は、東京の洋菓子技術者加藤栄吉を呼んでクリスマスケーキなどの洋菓子を川越で製造し始めた。それは当時の同地方へのキリスト教伝道と無関係であったとは思えない。

1878年に神学校生田井正一が宣教を始めたのは日本聖公会川越基督教会であった。その後5人の欧米婦人宣教師が1904年から第2次世界大戦頃まで交代で川越に在住しながら活動した。1904年秋からアメリカ出身のガートルード・ヘーウッド師やアンナ・ランソン師は初めて川越に在住した欧米人の様である。

ヘーウッド師は1904（明治37）年に川越で初めてのクリスマスツリーを北久保町（現川越市三久保町の市立中央図書館・川越郵便局周辺）の自宅に飾った。1888年から1898年の間には6人ほどの欧米司祭が日本聖公会の川越基督教会へ巡回した。1892年からはカトリック神父も川越へ巡回し始めた。その間、クリスマスツリーなど

のクリスマス文化は少しづつ普及し始めたと考えられる。また、1901年からは川越基督教会設立者の田井正一

司祭は川越に定住した。彼は1895年～1897年に米国の社会での宗教の働きを観察などしながらクリスマスなどの習慣も直接拝見することができた。以上の人たちは川越でクリスマス習慣の種を何回も蒔いたと考えられる。

ヘーウッド師らは1906年、川越会館で川越周辺の担当している日曜学校の生徒たちのために子供200人と親100人を集めてクリスマス会を開催した。ヘーウッド師の記録文によりそれは川越町での初めての公のクリスマス会であった。

また、3年後の1909年にヘーウッド師及びランソン師と交代したアメリカ出身のエリザベス・

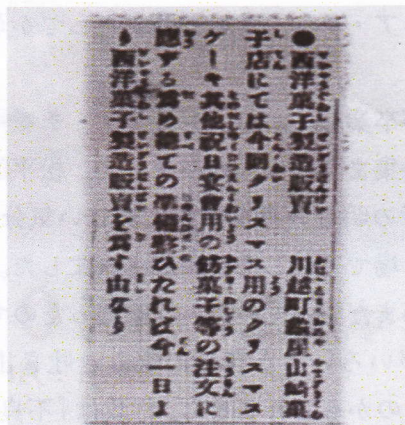


アプタン師やフランス出身のクロティルダ・マータン女医が700人程の日曜学校の子供たちのために川越会館をはじめ川越周辺の数ヶ所でクリスマス会を開催した。

1906年や1909年のクリスマス会の際には“cake”などを客1人ずつに配ったとの記録がある。亀屋はその頃クリスマスケーキの販売を開始していたが、アプタン師の記録文には、親に配った“cake”の場合、色は白の他にピンクやグリーンもあり、形は松の木や三日月などであったので練り切りの和菓子ではないかと思われる。ヘーウッド師らやアプタン師らの子供へ配った“cake”は和菓子ではなかったかと思う。

終戦後の川越キリスト教会で、1949年から活動し始めた青年会のある若者はクリスマスケーキを食べる機会がよくあり、とても気に入ったので家族に紹介したところ西洋菓子に不慣れていたこともあり、嫌がったという話を伺った。1906年の販売開始のクリスマスケーキは当時どんな反響を受けたかは不明である。また、どんな材料や形になっていたかなど不明な点が多い。が、現在のようにスポンジケーキにホイップクリームやバタークリームを塗り、イチゴなどで飾るようなクリスマスケーキではなかったかと思う。

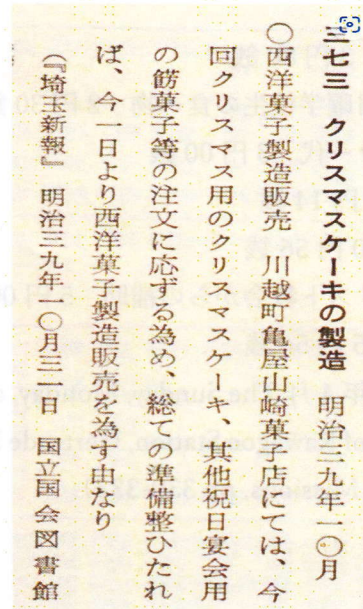
図1



明治39年(1906)のクリスマスケーキ販売広告
[埼玉新報10]

1906年10月31日「埼玉新報」に載っていた亀屋クリスマスケーキの広告。(2015年10月31日からの「Saitama 食べものヒストリー」展のパネルより、埼玉県立文書館)

図2



1906年10月31日「埼玉新報」に載っていた亀屋クリスマスケーキ広告の解説文。

(1984年3月発行 亀屋クリスマスケーキ広告、生活様式の合理化、7文化の大衆化と伝統文化、新編埼玉県史 資料編 25(近代・現代 7 教育・文化 1)、埼玉県 編、pp 52, 1002)

図3

Money expended for Christmas party:

	Yen
Rent of hall.....	8.00
Presents	10.92
Cakes for 200 children.....	7.40
Cakes for 100 guests.....	3.00
Oranges	3.80
Food for children from country	2.30
Juggler	3.00
Incidentals	2.14
Total	40.56
Received from Kawagoe Church	5.00
	Yen 35.56

1906年12月 ガートルード・ヘーウッド師やアンナ・ランソン師実施の川越会館での公のクリスマス会予算

川越会館利用費 8円00銭

クリスマスプレゼント費 10円92銭

ケーキ(練り切りの和菓子?) 子供200人分 7円40銭

ケーキ(練り切りの和菓子?) 大人100人分 3

円 00 銭

ミカン 3円 80 銭

田舎の日曜学校生の食べ物 2円 30 銭

ジャグラー代 3円 00 銭

雑費 2円 14 銭

小計 40円 56 銭

川越キリスト教会からの補助 5円 00 銭

合計 35円 56 銭

(1907年4月 The Sunday, Monday, and Tuesday Schools of Kawagoe Station, Gertrude Heywood 作, Spirit of Missions, pp 330-333)

参考文献：

* 1910年12月 "Miss Elizabeth Upton, writing from Kawagoe, Japan, tells of Christmas parties among her Japanese children", Our Letter Box, Spirit of Missions, pp 1028-1029

* 1982年11月3日発行「思い出ばなし」、著 山崎嘉七 亀屋会長(7代目)、発行所 KK 亀屋、p 49

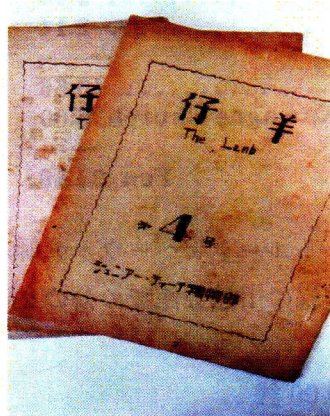
* "田井 正一 先生"、ドゥエル・ペーリ作
<http://kawagoe-seikoukai.org/taimasakazu-dwell.html>

70年前のジュニア・チャーチと『子羊』

マリア 高橋光江

教会の歴史資料委員会の山本元さんから「昔のことが判る資料があるから一度来て見ませんか?」とお誘いを受けたので、稲垣和子さんを誘って九月末に教会の資料室へ伺いました。山本さんはじめ7、8名の方が快く迎えて下さった上、お接待に与かり心豊かな一時を過ごさせていただきました。

さて、私が見たかったのは『子羊』というジュニア・チャーチ時代に作った機関紙のようなものです。



私が『子羊』を見たいと申しあげたら、山本さんはすぐにコピーに写してくださいました。70年も経っている上、わら半紙の粗末な冊子ですから、きつと見る影もない代物になっているはずですよ。家へ持ち帰って少しずつ読んでみました。上の段には、山本喜一さんが「教会に鐘を」という論説でした。教会は戦時中供出(鉄製品が戦争の弾に必要だったため)

により失われていたため、礼拝を報らせる鐘の音が無くてしばらくたっていたのです。私の作品は実話で、『強くなった猛(たけ)ちゃん』というものでした。これは、松村祐二さんから「何か書いて」と言われたので日曜学校の続きかと思い、子供向けのお話を書いてみたのです。私は『子羊』に載っている自分の作品を目にしたのは今が初めてです。だって『子羊』を担当したのはその後私がシニア・チャーチの一員になってからですから。

私達が卒業してから、ジュニア・チャーチは何か多勢集まるようになりました。松平師は「教会に若者の明るい声が満ちて楽しい気分になる」と何かの場でうれしそうに話されました。世間の受け皿がまだ整っていない状態だったので、教会に若者がいろいろな自分の悩みを吐き出す場としていたのかもしれませんが。行政は「不良化防止」を掲げて青少年に劇をやらせたりした時期があります。

それからまもなくジュニアたちは減少したのです。多くのサークルが生まれ、彼らは自由なのでその自分に向いている方向に進んで行きました。それと進学熱です。

教会は今では下部組織にジュニア・チャーチとして活動する場はなくなったのです。でも私はよく知っています。十代の若者が一座に集まり、いろいろ話し合い、時には肉鍋を囲んで談笑し、時には百人一首をしたり、楽しく過ごしたひとときがあったことを……。



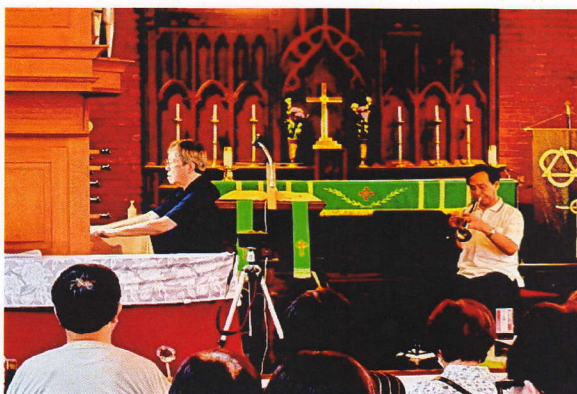
歴史資料委員会より

最近の資料委員会

資料整理を始めて10年目、毎水曜日には、6～7名の委員が奉仕に参加しています。本年からは新しいメンバーも加わり資料室は活気にみちています。どなたでもご自由にお出でください。

礼拝堂見学会

今回で6回目を迎える「礼拝堂見学会」。10月19日、20日（川越祭り）に開催され、両日で何と650名の方々がお出でいただきました。



今回は初めての試みとして「礼拝堂見学会ミニコンサート」を見学会の一部の時間を利用して開催しました。当教会信徒によるトランペットとオルガンの演奏が行われました。（写真上）

下記は来訪者にお問い合わせした感想アンケートの一部です。

○最近川越に越して来ました。近くに住んでおり、初めての教会訪問が出来ました。いろいろ説明を聞き、このような歴史のある場所とは知りませんでした。

- 穏やかな教会です。ホットします。
- ここの幼稚園の卒園です。この礼拝堂いつまでも残してほしい。
- 前を通るたび、この教会が気になっていました。今日は見学が出来て良かったです。
- 説明に感謝。素晴らしい宣教師の方々のご尽力で、このような立派な教会が造られた事に驚きました。ますますのご発展を。
- 何十年ぶりに讃美歌を歌いました。心が洗われた気がします。
- とても落ち着いた気持ちになりました。いつも外から見ていただけでしたので、今日は中に入れてよかったです。また来たいです。

川越「亀屋」とは？

本紙2ページ目に、「亀屋」について書かれていますが、一体どんな由来の店なのでしょう？

1756年、現在の長野県中野市の武家に生まれた初代は武士の道ではなく商人になる決意をし、十代でひとり故郷を出て川越で菓子屋を営むことになります。

亀屋新井清左衛門方にて菓子作りの修行の後1783年28歳の時に現在の地に「亀屋」という屋号をつけました。

江戸の昔より続く亀屋の味と技と歴史は日本の代表銘菓のひとつとして賞賛を受けています。

（亀屋ホームページより）